

(みちのものがたり) ツチノコのみち 岐阜県東白川村 守り神になった「幻の蛇」

有料記事

2019年5月18日03時30分



ツチノコを目撃例が多いという茶畑に、「つちのこ館」から借りた再現模型を置いてみた。実際に遭遇した人は、さぞかし驚いたろう＝2019年4月28日、岐阜県東白川村、上田潤撮影



緑の茶畑を薫風が通り抜ける。岐阜県東部の東白川村。1千メートル級の山々に囲まれた村のあちこちにツチノコの看板が立っている。「幻の蛇」と呼ばれる「生き物」である。

搜索するイベント「つちのこフェスタ」が今年も5月3日にあった。人気アニメ「妖怪ウォッチ」や「けものフレンズ」の影響だろうか。子どもを連れた家族が多い。

だがこの日、メイン会場から少し離れた場所にある「親田榎（おやだつち）の子神社」では、氏子たちによる神事が営まれた。「かしこみ、かしこみ……」。神職が祝詞（のりと）を唱える。「ツチノコは村の守り神なのです」。参列した桂川真郷（かつらがわまさと）さん（89）はそう語った。

地元有志の手によって神社が建立されたのは、フェスタが始まった1989（平成元）年4月。当時桂川さんは村長だった。ツチノコの死骸を埋めたとされる場所の土を木箱に納めて奉納した。

もみ殻をたたき際の道具「榎」に形が似ていることから漢字で「榎の子」と書くツチノコ。長い年月を経た道具に精霊などが宿って人をたぶらかす「付喪神（つくもがみ）」の一種という説もあり、妖怪として畏怖（いふ）されることもある。

確かな捕獲例はない。生物学的に存在は認められていないが、北は秋田や岩手など東北地方から南は鹿児島まで各地に言い伝えがある。中でも目撃者が多かったのが東白川村だ。役場によると体長30～80センチほど。ビール瓶のように太く、頭は三角形。尻尾は細くて短く、直射日光を極端に嫌うという。

*

ユニークなのはその行動。人間のようにいびきをかき、お酒が好きというのはご愛敬だが、薄気味の悪い目つきをしており、まばたきもする。垂直に立つこともでき、2メートル近くジャンプするという。だが、「見たことを誰にも言ってはいけない」「たたりがある」と信じられてきた。

「転機はフェスタ前年の88年。昭和63年でした」

つちのこ資料館館長の安江豊司さん（67）は言う。同年3月の村の広報紙。神土平（かんどたいら）に住む今井時郎さん（故人）の目撃談が「まぼろしの蛇 つちの子」という見出しとともに掲載されたのである。

夕刻。畑仕事から帰る途中、全長約40センチ、ビール瓶のように丸々太った蛇のような生き物を見た。体は灰色。頭の部分は黒っぽく、じっとしたままだったという。

のちに、村役場が発行した冊子には、今井さんのこんな証言も記載された。

「ちょうど足元にあったお手玉くらいの石をぶつけてみたら、タイヤに当たったような鈍い音がした。痛かったとみえて、こっちの方を見て、ワッと口を開けて怒ったわ。口の中は赤かった」

時代の流れだろうか。それまで口を閉ざしてきた住民の多くが「実はわしも見た」と役場に情報を寄せたという。

田辺聖子さんの朝日新聞夕刊が初出の小説『すべってころんで』や、矢口高雄さんの漫画「幻の怪蛇（かいじゃ）バチヘビ」などでツチノコブームが起きたのは70年代。その後も熱気は冷めず、奈良や広島など列島各地で捜索隊が現れ、話題を集めた。

東白川村の広報紙に目撃談が載り、「つちのこフェスタ」が始まったのは、そんな時代背景があった。

■純朴な心に不思議潜む？

バチヘビ、テンコロ、ツチコロビ、ゴハッスン……。

場所によって呼び名は違うが、ツチノコによく似た形態の生き物は古くから目撃されてきた。江戸後期の「信濃奇勝録」には「野槌（のつち）」と書かれており、太い胴体の生き物の絵も描かれている。出合った際の注意を喚起しているのが百科事典「和漢三才図会」だ。「下り坂では火のように速いが、上りは極めて遅いので、遭遇したら上へと逃げよう」という趣旨のことが記されている。

「いずれにしても、山で暮らす人々にとってツチノコは身近な存在だったのではないでしょうか」。東白川村出身で、ツチノコと日本人のかかわりをテーマにした作品を制作している記録映画監督の今井友樹さん（39）は語る。

小学6年生のとき、学校行事でもあった登山の帰りだった。集団の最後尾。斜面にあった石を剥がしながら遊んでいたとき不思議なものを目撃した。黒くて光沢があり、太くて体長は短かったという。

「手足はありませんでした。棒で突つくとほんの少し動き、やがて体を丸めて転がり落ちてきたのです。怖くなって走って逃げました。たぶん、あれはツチノコだったのではないでしょうか」

やがて高校進学のため家族の元を離れた。だが「東白川の出身」と言うと友だちから笑われた。

「『ツチノコなんているはずはない』と頭から否定するのです。でも、山の中では不思議なことが起こりうるということを前提に私たちの先祖の暮らしは成り立っていた。それは自然への敬いであり、畏（おそ）れなのです」と今井さん。

*

同じように悔しい思いをした人はいるだろう。ここ数年「つちのこフェスタ」に欠かさず参加している岐阜県関市の水野昭司さん（69）もその1人。子どものころ名古屋市郊外に暮らしていた。高度成長の開発ラッシュで周囲の山々が崩され、赤土が見え、ほこりが舞っていたという。

「家の近くを流れる清水にツチノコのような生き物がいたのです。開発から逃げてきたのでしょう」と水野さん。「馬鹿にされる」と思い、友だちには内緒にしていたが、大人になって矢口高雄さんの漫画「幻の怪蛇バチヘビ」を読んで考えが変わった。「自分が見たものとそっくり。僕は間違っていなかった」

ところで、ツチノコを町おこしにした自治体は全国各地にあるが、平成元年から令和元年まで30年もイベントを続けているのは東白川村ぐらいだろう。

理由について元村長の桂川さんは、明治時代の「廃仏毀釈（きしゃく）」との関係を挙げた。村には元々、寺が二つあったが、どちらも壊された。

「お寺を再興するお金がなかったのではないか。旧藩主の命令で廃仏したのだから、ずっと守っていかうとみんなで決めたのかもしれない。正直な人が多い村なのです」

蛇は神様のお使い。寺が1軒もなく、全世帯が神道だけに信仰の象徴としてツチノコが認識されるようになったのかもしれない。

私も何度か東白川村に通ううちに村に暮らす人たちの素朴さや純粋さに触れた。つい最近も集団でツチノコを見たという話を聞いた。「過疎化で失われつつある村民の結束を強めるために現れたのではないか」と話す人もいる。ツチノコに寄せる思いは熱い。

山道を歩いているとどこかにツチノコが潜んでいるような気がする。「チー」という音。ツチノコの鳴き声だろうか。漫画家、故・水木しげるさんの言葉を思い出す。

「人間の五感では把握しにくいものを、ないと言ってしまうのは簡単だが、ある種の存在感みたいなものだけがあるものも、私はあると思うのです」（絵本とキャラクターの月刊誌「MOE（モエ）」）

ツチノコよ。いつまでもこの美しい村を守っておくれ。

(文、写真・小泉信一)

■今回の道

山林が面積の約9割を占める岐阜県東白川村はその昔、「ないない村」と呼ばれたことがあった。コンビニも温泉もゴルフ場も信号機もなく、鉄道も走っていない、というのが理由だった。

この小さな村が1年で最も盛り上がるのが、ツチノコを捜索するイベント「つちのこフェスタ」。巳(み)年の1989年に始まり、村には「手配書」の立て札も掲げられた=写真。昨年は大雨のため初めて中止になったが、今月3日に開かれた30回目のフェスタには村の人口約2200人を上回る約4千人が訪れた。

捕獲したら賞金は当初100万円だったが、毎年1万円ずつ積み上がり130万円に。残念ながら今年も見つからなかったが、ツチノコをかたどった金色の板を発見した人には1%の1万3千円が贈られた。

村に流れる白川沿いの白川街道(今の県道62号など)を地元では「つちのこ街道」と呼ぶ。

■ぶらり

県道62号沿いに立っているのが、東白川村の特産や関連グッズを売っている「つちのこ館」(0574・78・3192、水曜定休)。第三セクター「ふるさと企画」が運営し、2階に目撃談や資料などを展示している「つちのこ資料館」を併設している。入館料大人300円、子ども200円。センサーで反応する電動式のツチノコ模型もあり、発見現場に居合わせたかのような臨場感を味わえる。

ツチノコが描かれた道路標識=写真=もある東白川村。朝方、乳白色のもやが立ちのぼる幻想的な光景は、いかにも何かが潜んでいそうな雰囲気だ。

明治初期の廃仏毀釈運動が徹底して進められたため、村には寺がないだけでなく、家庭にも仏壇はなく、冠婚葬祭は神式で営まれている。かつて寺があった村役場の前には、取り壊しのすさまじさを物語る石碑「四つ割の南無阿弥陀佛碑」がある=写真。縦に大きく入ったひびは割られた跡だ。

銘茶「白川茶」の発祥地と伝わる東白川村。京都・宇治から伝わり、疫病で苦しむ村人の間で薬用茶として広まったのが始まりとされる。村には、ほかにも数々の伝説が息づいている。「五介(ごすけ)」と呼ばれた怪盗が住んでいたとされる洞窟の近くには滝が流れており、その先の山でもツチノコらしきものを見た人がいたという。

■読む

釣り仲間とツチノコ捜索隊を結成したエッセイストの故・山本素石（そせき）さんが73年に著したのが『逃げろツチノコ』だ。宝くじ並みの高額賞金まで出てきた実情に失望。晩年は捜索を打ち切った。「ツチノコよ、捕まるな、逃げろ逃げろ、と言いたくなる」と書いている。

■味わう

朱色の斑点が目印の溪流魚アマゴ。村を流れる白川では釣りが解禁されている。クセのない味わいを楽しむなら塩焼きだろう。ほどよく脂がのっていて表面の皮はパリッ、身はふわっ。村内の食堂などで食べられる。

初夏を告げるアユの友釣りは6月中旬に解禁。旅館で旬のアユ料理を満喫するのもいい。

■読者へのおみやげ

「つちのこ館」で買ったツチノコのぬいぐるみを5人に差し上げます。住所・氏名・年齢・「18日」を明記し、〒119・0378 晴海郵便局留め 朝日新聞be「みち」係へ。23日の消印まで有効です。

◆今回は、韓国・光州を訪ねます。1980年に軍が民主化運動を弾圧、犠牲者が多数出た光州事件。言論統制下の記者や市民の軌跡をたどります。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.